

ごあいさつ

暦の上に春は立ちながら厳しい寒さが続く中、本日のご来展に心より感謝申し上げます。

私たちは、昨年2月のウクライナ情勢の急変を契機に、自分たちにも何かできることがないかという思いでこのプロジェクトを立ち上げ、様々な出会いとご縁に支えられながら、これまでにウクライナ、ミャンマー、アフガニスタンの歴史や今を知る企画、原爆被爆体験や多文化共生をテーマにこれからを考える企画を開催してまいりました。それぞれに故郷への思いや自らの体験に基づいてお話しくださる講演者の皆様との出会いから、報道ではクローズアップされにくい、戦争や内戦が始まるまでの普通の暮らしの中での人々の姿、国民性や文化、風土を知ることができ、あらためてそのように当たり前を守られるべき穏やかな暮らしこそが平和の原点であることに気づかされました。報道される映像や情報の向こう側には確かに私たちと同じ平和で自由な暮らしを望む人々がいて、その人々のいのちも私たちの周りの大切な人と同じようにかけがえがなく尊いものだということを忘れてはならないと強く感じています。

私たちは、プロジェクトを立ち上げてからこれまで、全国各地の同じ想いを抱く多くの方々とおオンラインや対面で出会い、平和の輪の広がりを実感することができました。その繋がりもまた、今まで知らなかった世界の現状を知るきっかけとなり、世界と向き合い平和を希求し続けることの重要性を改めて感じています。この活動から得られた気づきや発見は、自分の考え方を考えるきっかけになっただけでなく、これから生きていく上でも人生における大切な学びであると心から思います。私たち一人ひとりが持っているのは小さな力かもしれませんが、いつも平和を願い祈る心を持って周囲と接し、行動していけば、少なからず変わっていくことはあると信じています。

このような私たちの活動に沢山の皆様にご参加ご協力いただいていること、クラウドファンディングを通じた多大なるご支援をいただけたことを大変嬉しく感じており、すべての皆様に心よりの感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

本日の写真展はそんな私たちのこれまでの活動における学びや思いを伝えたい思いから、誰にもある大切な故郷の暮らしと風景に焦点を当てた企画となっております。一点一点が本当に魅力的で訴えかける力のある作品ばかりです。このような写真を提供くださる写真家の皆様との出会いもまた、何かに導かれたような思いで感謝のかぎりという気持ちです。写真に付けられたキャプションも素晴らしく作品をさらに深く味わわせていただけます。ぜひゆっくりとお読みになって作品を味わい、その写真の向こう側を想像しながらご覧いただければと存じます。

PEACE プロジェクト生徒有志一同

この写真展はクラウドファンディングの収益で運営されております。

Special Thanks

フォードジョン・美紀 様 浜本百合子 様 (株)エストラッド 様

その他、115件の皆様から目標額100万円を超える多くのご支援をいただきました。

皆様の温かいご支援に心世論礼申し上げます。

お写真を提供くださっている皆様

□UFFM (Ukrainian Female Film and Media Industry)

男女平等を実現するために、映画業界に従事する女性の推進、専門的能力の向上、そして支援を目的としたウクライナの女性の組織です。展示写真は、ウクライナの写真家たちがキーウ、ハルキウ、マリウポリで撮影したものです。ウクライナの人々の気持ちを芸術的に表現したもの、戦時中の生活を描写したもの、ウクライナの都市の美しい風景や建築物を写したもの、それぞれの写真家とSNSで繋がって応援してあげてください。

*Nika Fadeeva 氏の母ダーシャと息子ボリスの写真に関して、マリウポリから脱出するこの親子の物語が本冊子の最後に掲載しております、ぜひご一読ください。報道では、ウクライナの状況の全体像を見ることが多いと思いますが、Fadeeva さんの作品を通して 1 組の親子の生活にふれることで、自分がこの状況に置かれたらどうするかを考えさせられます。

□アーティスティック ウクライナと酒井有理弥氏

ウクライナ人と日本人の両親を持ち、11 歳までキーウで生活されていた酒井様は、戦争が始まり、ウクライナを何とか助けたいという想いから、Facebook に投稿するなど活動をされてきました。その活動をきっかけに UFFI 代表のクセニア・ブグリモワさんと知り合うことができたそうです。ウクライナの女性映画監督や写真家を支援するため、日本で映画上映会と写真展を開催できないかと相談があったことがきっかけで「アーティスティック・ウクライナ」を立ち上げられました。

ー酒井様の活動の思い、写真から受け取っていただきたいメッセージー

民族衣装やピサンキなど、ウクライナの伝統的なものは日本でも紹介されていますが、現地の若者が創り出す現代の文化・芸術をみてもらう機会が日本ではありませんでした。ウクライナに才能ある若者がたくさんいることを伝えたいですし、その魅力を感じていただければと思っています。また、今回の展示写真から、ウクライナ人の感情やウクライナの町の様子が見て取れます。瓦礫が積まれた町や悲惨な場面ではなく、戦時中の日常の光景からウクライナに親近感をもってほしいです。

いま世界の各都市に住むウクライナ人が、募金活動をはじめ母国ウクライナへのさまざまな支援活動を行っています。今回の、写真展がその一例となり、その輪が広がっていくことを望んでいます。

□写真家 川口敏彦氏

私たちがミャンマーを取り上げた企画の際に「ミャンマーの明日を考える会」と繋がれたことで川口さんとも出会うことができました。私たちのこの企画の提案に快く応じ多大なるご協力をいただきました。

沼津市のご出身で、読売新聞東京本社写真部に入社され、1996 年にタイ・バンコク赴任から 3 年間、アジア全域を取材されています。2016 年の退職後、1 年半にわたりミャンマーに滞在されています。写真はその当時撮影したミャンマーの日常の一コマです。キャプションのお言葉も心を打ちます。

1998 年インドネシア・ジャカルタ暴動で東京写真記者協会賞海外部門賞を受賞。1999 年インドネシア・東ティモール紛争で東京写真記者協会賞海外部門賞を受賞。2000 年韓国・南北離散家族相互訪問で東京写真記者協会賞海外部門賞を受賞。